西都市立妻北小学校　学校通信

妻北っ子だより

令和３年度　２月号　文責　校長

「　節分・立春　」

２月３日は、読んで字のごとく「季節を分ける」という意味の「節分」です。
空気の冷たさだけでは感じられないものの、日の当たる時間の長さや周囲の木々の芽吹く様子から、季節が変わりつつあることがうかがえるようになってきました。
そして、４日は「立春」。北京（ぺきん）で開催される冬季オリンピックを応援しながら、春の到来を待ちましょう。

「なぜ、日本の若者は自己肯定感が低く、自信がないのか？」

＜「人間の器」丹羽宇一郎著より一部抜粋＞

これは家庭や学校における教育に、何らかの問題があるということでしょう。大きな理由として考えられるのは、決まった答えを押しつけるばかりで、自由な発想を阻害する教育が行われていることではないでしょうか。
欧米では幼少期から課題を与えて自由に考えさせるという教育を積極的に行いますが、日本ではこうした教え方はあまりされません。正解が決まっているものを一方的に覚えさせるやり方では、考える力や柔軟な発想は培えませんし、自ら進んで課題に取り組む自発性や自己肯定感も育ちにくいと思います。
～略～
答えが決まっているような事柄で正解ともいえる結果を出せば褒め、逆に結果が出なければ、その過程でどれほど頑張っても、何の評価もしない人がいます。
それとは対照的に、結果いかんにかかわらず、努力する姿勢そのものを褒める人がいます。あるいは正解などないようなことに対して、オリジナリティある発想をしたことを褒める人がいます。
やる気や自発性を引き出すのは、明らかに後者のほうです。～略～

※　日々子どもたちと向き合う時間を確保し、授業改善に努めている学校。家庭学習においても保護者の皆さんに多大なご協力をいただいている状況の中、
「単元ごとのテストは８割以上できる。そこに応用や活用が加わると正答率や通過率が低くなる」「自分が感じたことや考えたことを表現することが苦手」といった傾向が浮上しています。
「基礎的・基本的な内容（知識や理解）の定着」「応用・活用する力（思考力・判断力・表現力等）の養成」について、私たち大人も自由かつオリジナリティある発想をもって手立てを講じていく必要があると考えています。
児童一人一人に配られたタブレットや外部（地域）人材を活用した取組、興味関心のあることを追究する時間や場の確保（家庭学習含む）等、次年度に向けた構想を思索している校長室です。

「コロナウィルス」

いまだ収束の気配を見せない感染の状況が続いています。
何度も記述してきましたが、「いつ・どこで・だれが」感染してもおかしくない状況です。
子どもさんの登校について、様々な問合せが寄せられています。
学校としては、保健所や医療機関の指示にしたがって判断していただくことを基本とし、不安があれば休ませることも選択肢のひとつとしてご提案しているところです。

２月２日（水）に実施予定の「学校保健委員会」を中止にしましたが、感染状況等によっては、参観日、遠足、卒業式までを見通した変更を想定しているところです。

巷（ちまた）では「重症化しない」「そろそろ収束するのでは？」という見方もあるようですが、学校においては、子どもさんや保護者の皆さんの安心・安全の観点から、全職員、「感染対策」と「学びの保障」の両立に努めております。ご理解とご協力をお願いします。

行事

３月

1 日（火）読書の日
2 日（水）卒業式練習（６年生）
4 日（金）卒業式練習（５・６年生）
委員会活動（評価）
7 日（月）特別校時（～11 日）
全校朝会
心のアンケート週間（～11 日）

３月

9 日（水）卒業式練習（６年）
11 日（金）卒業式練習（５・６年生）
17 日（木）卒業式予行練習
21 日（月）春分の日
23 日（水）卒業式準備（４・５年生）
24 日（木）卒業式
25 日（金）修了式・大掃除
30 日（水）離任式（予定）

※上記行事については、感染症拡大防止の観点から、やむを得ず変更・縮小・中止する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

「有（あ）り難（がた）い」

「校長先生、おはようございます。」と言われたり、上級生が下級生の手をとり歩道橋を降りてくる姿を見たりするだけで、心が温かくなる朝。
「さようなら、また明日ね。」というと、グータッチや笑顔が返ってきて、明日もがんばろうと思う児童下校のひと時。

妻北小に赴任して間もなく１年。年をとったせいかもしれませんが、前任校でもそうであったように、子ども達の活動や先生方の指導支援する姿がまぶしく見えます。

先輩から「当たり前」の対義語は「有り難い」であるという教えを受けたことがあります。コロナウィルス感染対策等で、明るい話題を見つけるのに苦労する昨今です。パソコンやスマホ画面で経験できない「当たり前」の出来事に、うれしさや感謝の意を覚えたり、それらを伝え合ったりする場。見方を変えれば、学校や家庭は、「有り難い」の宝庫かもしれません。